

# 教育者としての河崎なつの歩み

－その原点を探りながら－

森口洋一

(奈良教育大学 社会科教育講座)

History of Natsu Kawasaki as an Educator:  
While Exploring the Origin

Hirokazu MORIGUCHI

(Department of Social Studies Education, Nara University of Education)

**要旨：**河崎なつ（1889—1966 河崎ナツ、河崎夏子と表記される場合もある）は、戦前は市川房枝らと共に婦人参政権獲得運動に加わり、戦後は参議院議員も務めた。日本母親大会の創設や原水爆禁止運動にも関わった社会運動家として、広く知られている。その一方で河崎は優れた教育者でもあった。奈良教育大学の前身校の一つである奈良県師範学校女子部を卒業後、母校でもある五條尋常小学校を振り出しに、東京女子高等師範学校や同校の研究科への進学を挟みながら、小樽女子高等女学校、東京女子高等師範学校、東京女子大学、女子英学塾（現在の津田塾大学）、文化学院、白梅学園短期大学などで教鞭をとり、専門とする作文指導には定評があった。河崎について論じた文献は、社会運動家としての側面に注目したものが多く見られるが、河崎の出発点は教育者であり、その終着点も教育者にあった。本稿では河崎の教育者としての歩みをトータルに俯瞰しながら、その原点を探っていった。

**キーワード：**河崎なつ Natsu Kawasaki  
教育者 educator  
作文教育 composition education

## 1. はじめに

河崎なつは、戦前において市川房枝らと共に婦人参政権獲得運動に携わり、戦後は母親大会の設立に尽力、原水爆禁止運動にも取り組んだ社会運動家として知られる。1947年に行われた第一回参議院選挙においては、全国区から出馬し当選し、一期を務めた（出馬時は無所属。選挙中に社会党の公認となる）。参議院では厚生委員会に所属し、厚生委員会委員長も歴任している。その後1955年には第1回日本母親大会の事務局長、第1回原水爆禁止日本協議会代表を務め、その華々しい社会運動家としての功績は、高く評価されている。

河崎は五條尋常小学校、小樽高等女学校、東京女子大学、女子英学塾（現在の津田塾大学）、文化学院、白梅学園短期大学などで教壇に立ち、作文教育に力を入れた教育者でもあった<sup>1</sup>。

河崎には単著を含め多くの著作物があるが、国語教育や作文教育などに関する授業論や教材論を詳述したものは見当たらない<sup>2</sup>。河崎が1921年の創設から1941年に辞職するまで、中心的なスタッフとして勤務した文化学院<sup>3</sup>については、任（1998）<sup>4</sup>、文化学院の創設者であ

る西村伊作については葛井（2018）<sup>5</sup>の論文があるが、いずれも河崎に注目したのではなく、文化学院の教育を総体的に捉えていたり、西村伊作に焦点をあてている。

小笠原（2008）は、大村はま<sup>6</sup>の「国語科教員」としての基盤をつくった可能性として、大村が東京女子大学に在籍していたときに作文の授業を担当していた河崎の存在に注目し、「大村の自伝的資料において河崎なつの授業について触れられている箇所はほとんど見当たらないため、資料探索を進める必要がある」と指摘している<sup>7</sup>。しかし河崎の教育者としての側面をトータルに取り上げた論文は、管見によれば見当たらない。

河崎は五條尋常小学校、小樽高等女学校、東京女子高等師範学校、東京女子大学、文化学院、白梅学園短期大学といったさまざまな学校・校種で教鞭を執ってきた。このような貴重な経験を持つ教師は、きわめて少ないだろう。そして教師とは教える側の人間であるが、教師自身も教え子と揉まれながら多くを学び成長していく。それゆえに、いずれかの時代を焦点化するのではなく、河崎の教育者としての足跡を俯瞰的に把握することで、その原点を探り出していきたい。

具体的な方法として、まず河崎の生い立ちに注目し、幼少期を過ごした五條の風土との関係性を探る。次に五

條尋常小学校から東京女子高等師範学校に至る学びが、のちの教育者としての河崎にどのような影響を与えたかを考察する。三つ目には、教師としての河崎が行った具体的な授業実践を、当時の生徒や学生が書き残している文章を手がかりにして分析をする。専門の作文や国語を中心にしていくが、必要に応じて、それ以外に担当していた歴史、地理といった科目の記録も参照する。また河崎が学級経営や生徒指導などの授業以外の時間で、どのように生徒と関わってきたのかをも考察の対象とし、教師としての河崎を多面的かつトータルに把握していきたい。本稿に関わる年譜を作成し（表1）、河崎の歩みを考える資料としていく<sup>8</sup>。

表1 河崎なつ年譜

|             |   |
|-------------|---|
| 1889（明治22）年 | 6月25日、奈良県宇智郡五條町（現在の奈良県五條市）新町で、河崎常三郎、さとの長女として生まれる。父は時計店を営んでいた。生後まもなく母が亡くなり、里子に出されるが、父の再婚により戻される。 |
| 1902（明治35）年 | 五條小学校高等科卒業。小学校では二回飛び級をしている。奈良県師範学校女子部入学（一期生）  |
| 1905（明治38）年 | 奈良県師範学校女子部卒業<br>奈良県五條尋常小学校訓導  |
| 1908（明治41）年 | 東京女子高等師範学校入学  |
| 1912（明治45）年 | 小樽高等女学校教諭<br>国語、地理、作文を担当。全校500人の作文を一人で受け持つ。作文をとおして女生徒の生活を知り、生活教育への関心を持つようになる。                   |
| 1916（大正5）年  | 東京女子高等師範学校文科研究科入学。垣内松三に師事し「創作心理」を研究する。同時に東京帝国大学の哲学科に通い、ヴントの実験心理学の講義を聴く。                         |
| 1917（大正6）年  | 東京女子高等師範学校に作文担当の講師として迎えらる。  |
| 1918（大正7）年  | 東京女子大創設と同時に作文担当の教授として招かれる。（1929年まで勤務。文化学院発足後は授業のみを担当）大正14年に入学してきた大村はまは、教え子の一人である。               |

|             |   |
|-------------|---|
| 1921（大正10）年 | 4月文化学院発足。新入生は女生徒33名。校長西村伊作、学監は与謝野晶子と石井柏亭。河崎は教務・庶動主任を務める。国文科教授として作文や現代文学を担当し、地理や歴史も受け持つ。現代文学では、夏目漱石や志賀直哉、有島武郎、菊池寛、与謝野晶子、芥川龍之介などの短編を集めた「文学読本」という文化学院のために作られた本が使われた。読売新聞紙上の「身上相談」を担当し好評を博する。 |
| 1925（大正14）年 | 婦人参政権獲得期成同盟が普選獲得同盟と改称され、議会運動委員会の中心メンバーとなる。市川房枝、新妻イト、加藤しづえ、山高しげりらと、婦人問題研究所を設立。   |
| 1928（昭和3）年  | 津田英学塾（現在の津田塾大学）国文科教授。（文化学院、東京女子大学と兼任）   |
| 1932（昭和7）年  | 津田英学塾退職<br>NHK放送委員（1940年まで）   |
| 1933（昭和8）年  | 『新女性読本』を文藝春秋社から出版   |
| 1934（昭和9）年  | 『明日に生きる女性』を交蘭社から出版  |
| 1940（昭和15）年 | 3月 西村伊作が「月刊文化学院」10号に発表した「数字と偶像」が警察当局の注意を受け、西村と石井柏亭の対立の原因となる。学生による教員排斥運動も起きる。<br>6月 河崎なつ謝恩会開催される。  |
| 1941（昭和16）年 | 文化学院を退職する。簡易保険局清修女学校（女子職員の一般教養と稽古ごとを主とする学校）校長。  |
| 1942（昭和17）年 | 5月29日与謝野晶子死去。6月1日に行われた葬儀で、弔辞を読む。  |
| 1943（昭和18）年 | 厚生省栄養専門学校（厚生省が戦時体制推進のため、栄養士を養成することを目的とする学校）校長。婦人解放運動は時局に取り込まれていくが、河崎も例外ではなかった。9月1日文化学院強制閉鎖。軍部が接収。（1946年4月再開される）   |
| 1946（昭和21）年 | 民法改正のための司法制度審議会委員   |
| 1947（昭和22）年 | 参議院議員に当選（全国区選出）   |

|                 |   |
|-----------------|---|
| 1955 (昭和30) 年   | 第1回日本母親大会事務局局長<br>第1回原水爆禁止協議会大会議長<br>日中友好協会副会長  |
| 1957 (昭和32) 年   | 白梅学園短期大学講師。(のちに教授) 文学、児童福祉を担当。白梅学園常務理事の樋口愛子が、津田英学塾の学生の時に河崎から作文指導を受けていた縁で、迎えられた。       |
| 1961年 (昭和36) 年) | 白梅学園短期大学教授。保育科長。担当の講義は児童福祉のみとなる。白梅学園短期大学には、病気で辞職する1966(昭和41)年10月まで在職。                 |
| 1966年 (昭和41) 年) | 8月22日 病を押して第12回日本母親大会に登壇。生前最後のスピーチを行い、「母親がかわれば社会が変わる」という名言で締めくくる。11月11日 脳溢血で死去。享年77才。 |

## 2. 河崎の生い立ちと五條の町

河崎は明治22年6月25日、奈良県宇智郡五條町(現在の奈良県五條市)新町で生まれている。父常三郎、母さとの長女で、兄が3人いた。生後まもなく母が亡くなり、里子に出される。6年後に父の再婚に伴い生家に戻されている。河崎の二つの回想録から、幼少期に関する文章を記していく<sup>9</sup>。

勤王倒幕の第一声を挙げて、明治維新の魁となった十津川の義挙で有名な天誅組と関係の森田節齋<sup>10</sup>も、五條の人で、代官屋敷を襲撃した天誅組の本陣の櫻井寺の門前に私の本家があったところから、そのときの模様を詳しく書きとめた祖父の本城久平の見聞録が、最近発見されまして、維新史の研究に貴重な資料を加えることができました。明治の社会運動家として樽井藤吉<sup>11</sup>も、五條の産、私の親戚にあたるひとで、晩年よく私の家へ遊びに来ていました。自由民権時代には、自由党の勢力が伸びてきて、板垣退助が馬にまたがって五條の町の演説会へ乗り込んできたことを覚えています。のちにまた水平社運動が起こったときにも、五條の町は全国でも有名な運動の中心地になっていました<sup>12</sup>。徳川時代は幕府の天領で、土地の気風にはほかの城下町のような封建制の少なかったせいも、天誅組、東洋社会党、自由党、水平社——この歴史の線の示している通り、反骨とも申しましようか、時流と闘うといった精神が、町の伝統のなかに流れているのを見逃すことができません。現在東京に出て、婦人運動の隊伍に加わっている私自身のなかに、この郷土の血が流れているのかも知れない、と

なにかにつけて思うことがあります。<sup>13</sup>

河崎は五條の町の政治的風土から受けた影響を、このように感じている。ちなみに祖父の本城久平は代々の書肆で、若かりし頃の陸奥宗光が、食客として本城宅に身を寄せていたことがあるという。

## 3. 河崎の学びと教師としての歩み

河崎の学びと教師としての歩みは、やや複雑であるが、時代を追って見ていきたい。

### 3.1 五條小学校時代の河崎の学び

まず河崎が教師を目指したきっかけが、どこにあったのかを探っていきたい。

私が教師となったのは、自分から進んで教育界に志を立てたのではなかった。あとで言えば、私が小学校の二年生のとき、主任の先生が、私の父をたずねて、「あの子は先生にするといい!」といったので、先生を神に近く思っている父は、心にふかく決していたのだそうである。高等小学校卒業の年に、県に師範学校女子部が創設されたのだが、当時の校長先生が私の父を呼んで、「そこに入学させなさい!」といったので、私は急に受験することになった<sup>14</sup>。

小学校時代の河崎自身には、自分から教師を目指すという夢や目標があったわけではなく、教師のすすめで師範学校を受験したようである。小学校で二度も飛び級を経験している河崎は、奈良県師範学校女子部の入試でも三番の好成績で合格している。同じ小学校から受験した十数人のなかで、唯一の合格者であった。おそらくは小学校の教師や校長は、河崎の成績の良さから、奈良県師範学校女子部への進学をすすめたものと思われる。五條小学校高等科時代に河崎が影響を受けた教師として、岡本作次郎がいる<sup>15</sup>。

高等科の一年で教えていた岡本作次郎先生の深い感化は、今でも忘れずにいられません。これまでの作文は「筆は竹と毛によって造り…」というような概念的な指導をうけていたのに、この先生は「川へ洗濯へ行ったのなら、そのことを書け」といった調子で、現実の体験を重んずる自由作文を課して下さいました。詩や俳句などの文学趣味を植え付けて下さいました。やがて、六週間現役で兵隊においでになったので、わずか一学期だけの御縁でしたが、のちに私が女高師を出て作文の教授を受け持つようになってから、その当時における岡本先生の教えの貴さが、ほんとうの意味でわかったような気がしました。この岡本先生は、その後ドイツ洋行、東京文理科大学の人情主事として大勢の学生から慕われた方で

ありました<sup>16</sup>。

河崎の作文指導には定評があったが、作文教師としての原点は高等科の一年時に学んだ、岡本作次郎の教えにあったと言える。岡本の授業を受けたのは高等科の一学期間だけで、岡本との思い出を綴った文章は、河崎が48歳の時のものであるにもかかわらず、当時のことを鮮明に記憶していることに驚かされる。深川明子(1979)<sup>17</sup>によると、明治時代後期の作文(綴方)授業は、自分の思想や感情を表すことよりも作文技術の習得に重点が置かれており、河崎が観念的と感じた「筆は竹と毛によって造り…」といった授業は、当時としては標準的な授業であった。「川へ洗濯に行ったのならそのことを書け」という岡本の指導は、日々の生活そのものが作文の題材になるということである。自然に恵まれた五條の地で、「木のほりをして遊び、桃や柿をちぎっては食べ、川では沢ガニを捕まえ、その一方でよく家の手伝いをし、機織りで自分の着物もこさえた<sup>18</sup>。」という河崎の少女期の日常生活が、岡本の教えと調和したのであろう。

このように岡本には深い感化を受けた河崎であったが、高等科を卒業し進学した奈良県師範学校女子部の教師との相性はよくなかったようである。

### 3.2. 奈良県師範学校女子部時代の学び

寄宿舎に入る早々、舎監の伏見りゆう先生に叱られてしまいました。学校で支給された蒲団についている白い大きな布が、田舎者の私どもには、シーツだということがわからず、先生のお部屋へ、私が代表になってお伺いを立てに参りました。ところが、田舎者丸出しの不作法な態度が、先生のお気に召さなかったのでしょうか。「ちゃんと三つ指ついて『いかがいたせばよろしいでしょうか』と聞くものだと、手きびしくおっしゃいました。伏見先生は、欧化主義から国粹主義へ移った時代のお茶の水<sup>19</sup>の卒業生で、女芸百般に精通された方でしたから、ものを置くにも畳の目を数えて置くといった風に厳重で、私どもがまごまごしていると、すぐ「土百姓！」と言って、お叱りつけになるのです<sup>20</sup>。

また、次のこのようなエピソードも河崎は記している。

夏休みに、友人と二人連れで大台ヶ原に登った私は、山椒魚の子供をつかまへたり高山植物の標本を集めたりして、休暇明けに日記を添えて学校に提出しました。ところが、校長先生は、始業式の訓示のなかで、おほめ下さると思いのほか、「本校の生徒で、女だてらに大台ヶ原に登った者がある。つつしみを忘れたけしからん話だ」と、またきついお叱りを受けました。尤も標本の方だけは、お受け取りになったようでありました。

明治三十六年に、巖頭の感を残して華嚴の滝に飛び込んだ一高生の藤村操の事件は、多感な青年男女に大きな

衝撃をあたえた出来事でしたが、学校側では、「社会と接触させるからあんな間違いを起こすのだ」というので、寄宿舎の取締は一そうの厳重さを加えてきました。教科書以外の読物は絶対に許さず、私どもの留守の間に部屋を見回って、小説や文学書の類を一切取り上げてしまいました。私の愛読書の「太平記」までがその災いにあいました。新聞や雑誌を読むことも厳禁。おかげで私どもは、日露戦争がどうなっているか、ほとんど何も知らないで暮らしていました<sup>21</sup>。

このように奈良県師範学校女子部時代の思い出として三つのエピソードが紹介されているが、いずれも不合理に感じた出来事ばかりで、残念ながら当時の河崎が影響を受けた教員や印象に残る授業についての記述は見出せない。奈良県師範学校女子部を卒業した河崎は、郷里の五條尋常小学校へ赴任する。

### 3.3. 五條尋常小学校訓導時代

当時のことを述懐した河崎の文章を見てみる。

驚いたことには、学校へ弁当を持ってこない子供があるではありませんか。一方ではまた、お昼前になると、暖かい弁当を女中が届けに来る生徒もありました。私は、自分の小遣いをさいて、あわれな欠食児童に、お菓子やパンを買って与えていましたが、長続きしないので、郡役所に相談に持っていったところが、「そんなことはこちらではどうにもならん」と、頭からはねつけられました。世間知らずの私も、この児童の生活を通して、さまざまの生活相のあることを教えられました<sup>22</sup>。

郡役所に直訴するところに、後の社会運動家としての片鱗を見ることができよう。

### 3.4. 東京女子高等師範学校での学び

3年間の五條尋常小学校勤務を経て、明治41年に河崎は上京し、東京女子高等師範学校に入学する。ところが想像していた女高師に対するイメージとは大きく異なっていたようである。

先生方は、二言目には、女子の最高学府だと、おっしゃいますし、私どもも袴をはいてお茶の水橋を渡るときは、なにかしら学問をしているという誇りに胸をふくらませていましたが、しかし、学課の内容は、まるで感激のない、空虚なものでありました。「土百姓」といって生徒を罵る先生が、この学校にもいらっしゃいました。日光へ旅行したときの紀行文を、口語体の文章で書いて提出したことに対して、ある先生は「これは文章でない故、直しようがないからお返すする」とおっしゃったときの私の失望は、決して小さいものではありませんでした<sup>23</sup>。

このように女高師の教育に失望した河崎であったが、歌人としても知られる尾上柴舟の授業だけは、惹かれるものがあったようだ<sup>24</sup>。

そうした砂漠のような生活の中で、尾上柴舟先生の作歌の時間だけは、オアシスのように思われました。歌をつくって差し出すと、先生からは「また晶子調か」といつて、ひやかされておりましたけども<sup>25</sup>。

### 3.5. 小樽高等女学校教諭時代

1912年(明治45年)河崎は、小樽高等女学校へ赴任し、作文の授業を担当する。当時の教え子である中井、中川、土井の回想が残されている。

それまでは病気見舞いの手紙とか、何かのお礼状とか、虫の音をききにお出で下さいとか、そんな題で作文を書いておりました。河崎先生になりましたら、題も書き方も全然違います。『ふみ切り番』というのを書いた人がありまして、毎日通るふみ切り番の生活をみて感じたことが書いてあるのですが、実に生き生きと上手に書かれていました。私たちには日曜日にはどういうことがあったか、というような生活記録を書かせるようになさいました。みんなとても上手になりましたね。先生の下宿に遊びに行くと、毎日毎晩、作文を読んで徹夜で点をつけていらした。みんながどんどん伸びていくから面白くて、徹夜しても楽しかった、とおっしゃっていました<sup>26</sup>。

この三人の教え子の話を聞き取った林光は、小樽高女時代の河崎の作文授業を、「なつはあまり教科書を使わず、啄木の詩や小説などを読ませ、新聞の話題や自分の家の歴史などを書かせた。書いたものには一つひとつ丁寧な添削と批評をつけた。作文から生徒の特長を見つけ、それを本人に知らせてはげました。こういういねいな接し方で、だれもが思うことを表現するようになり、生徒と心の交流をもつようになった。自然主義文学への共感と、当時広まっていた「自由課題」という作文教育を実践していたのであろう<sup>27</sup>。」と評している。そこには五條尋常小学校高等科の児童として学んでいた頃の河崎が、恩師の岡本作次郎から、「川へ洗濯へ行ったのなら、そのことを書け。」といった調子で、現実の体験を重んずる自由作文を課されたと連なってくる。

小樽高等女学校の流れを汲む桜陽高等学校開校八十周年記念誌には、在職中の河崎に関する記述がある。

手許にある庁立高女校友会誌『華園』をみると、いわゆる婦徳涵養の意義を持つ短歌、俳句、詩などが多く収載されている。特に短歌は当時の知識人の必須の教養とされ、校長を始め教員、生徒らが競って出詠している。(中略)

「製油工場をみる(大4.5)」などの題詠一一九首をものにした河崎なつ教諭の作品が見える<sup>28</sup>。

片隅に積まれし袋幾億の葉種の生(いのち)もてるかの袋火喰とり首ふりふれば天地の青と黒との色みだれ散る

河崎は小樽高等女学校で4年間を過ごし、東京女子高等師範学校研究科で学ぶために東京に戻っている。その後の1921(大正10)年から河崎が教鞭をとった文化学院において、担当した日本地理の授業を、当時の学生が振り返っている。

「さあ、みなさん。東京駅から汽車に乗りましょう。いいですか。東京駅——ではなかった。今日は上野だ。はい。上野のところをおさえて下さいよ。ここから汽車でずうっと北の方へ行きましょう。この鉄道は、何線ですか。」みんなは「東北本線」と答え、それから地図の上での東北旅行がはじまります。鉛筆で線路の上を辿りながら、途中の駅々でちょいちょい道草をして、那須の原では金毛九尾の妖狐が現われ、忽来の関では武将の風雅。牡蠣をたべたり、鉄瓶や馬をほめながらしながら、仙台、岩手、青森と行くにつれて、そのところどころの文化、産業の解説が一問一答の形で進行するうちに、とうとう青函連絡船で海峡を渡ってしまうと、そこは北海道、マツカリヌプリ。カムイヌプリ。ヌプリとはアイヌ語で山、という意味であること。カムイヌプリの麓に眠る摩周湖の神秘的な美しくさ。エゾ松・トド松・広大な平原。話がとんで、先生の小樽高女在職時代の思い出に移り、急に先生の顔がいきいきと輝くと、雪煙をあげてスキーに興じられた若き日々のことを、さも楽しげに表情たっぷりにお話になるのです。もち論、まだスキーなど珍しかったその頃です。「これからのにっぽん女性は、水泳でもスキーでも、どんどんやって、大いに頑張らなくては。—そうだ。いつか、あんたがたを北海道に連れて行ってあげよう。そしてね、しゅーっ—しゅっ、って、スキーを穿いて、みんなして雪の中を滑るの。」

地理はいつのまにかそっちのけで、私たちはわけもなく「わあ—わあ—」と歓声をあげて、夢のような話にきき入るのでした<sup>29</sup>。

河崎の担当した地理の授業風景であるが、その話術によって生徒が引き込まれていく様子がよくわかる。河崎は小樽での4年間の勤務を終え東京に戻るが、その後に小樽高女時代の教え子達と在京の同窓会をつくり、直接の教え子ではない卒業生も加わり、200人もの会員を擁することになったという。小樽高女での勤務は4年間に過ぎなかったが、この文化学院時代の地理の授業から、小樽時代の生徒との濃密な日々が、深く脳裏に刻まれていたことがうかがわれる。

小樽高女に4年間勤務した河崎は、再び上京して東京女子高等師範学校研究科に入る。大正5(1916)年のことである。河崎は東京女子高等師範学校研究科修了後に、作文教師として、そのまま母校に迎えられる。

「しかしどうもお茶の水の空気は、私のような野性的な人間の肌に合いません。作文の時間に文学的な教材を使っていた私に対して、生徒に小説を読ませてくれては困る、と言ったような苦情がでてきたりしましたので、わずか一年でやめてしまいました<sup>30</sup>。

### 3.6. 東京女子大学教授時代

河崎は1918(大正7)年に創立された東京女子大学に、作文教師として採用される。河崎の女高師研究科時代の指導教官であり、新設された東京女子大の国文学科の建設を任されていた垣内松三は、学科の経営に関して「表現力の養成に力点を置いて」作文に力を入れていくことにしたという。そのために河崎を招き作文の講義を担当させた。

「河崎氏は多く書かせて、親切なる添削を施し、それについて話合が行われ、各自の所有する言葉の真実の力をめきめきと生きたたせるまでには並々ならぬ努力を惜しまなかったのである」<sup>31</sup>

このように作文教師としての技量を高く評価されていた河崎であったが、胸中は変わっていった。

(小樽高等女学校での4年間の勤務後に、女高師研究科に入り「作文心理」の研究をして)それからは、女高師、東京女子大、女子英学塾、文化学院などの作文の教師をしていたのだが、私の作文教育は、文学に通ずる心からはなれて、作文をとおして女の生活——の姿——社会と家庭における封建的因習に打ちひしがれた女の生活の姿を知り、だんだん婦人問題から婦人運動に関心を持つようになり、婦選運動、女子教育運動に力のかたむけていくうちに、生活の経済的階級差を知り婦人の背に負っているこの二重の重荷をとりのぞくことに自分の使命を見出したのであった<sup>32</sup>。

「文学に通じる心からはなれて」「だんだん婦人問題から婦人運動に関心を持つようになり」「婦選運動、女子教育運動に力のかたむけていくうちに」「生活の経済的階級差を知り」「婦人の背に負っているこの二重の重荷をとりのぞくことに」「自分の使命を見出したのであった」という河崎であるが、教え子の樋口愛子の話はそのことを裏付けている<sup>33</sup>。

「先生の授業は、たいへん論理的で明確でした。ひどく迫力があり、アジテーターではなく、中身をしっかりと

もっていらしてそれを歴史的にも地理的にも周到な説明を加えながら、しかもエピソードをつけ加えて、情熱的にお話しなさいました。たとえば自分がどうして婦人運動をやるようになったとか、イギリスではじめて参政権運動をはじめたバンカースト夫人(1903=明治36年=に婦人政治社会度同盟を結成して運動)の話とか、クララ・チェトキン(1901年=明治43年=第二回社会主義婦人会議で3月8日を国際婦人デーにすることを提唱したドイツの革命家)の話とか、そういうすぐれた女性の話をして、また身上相談の例<sup>34</sup>もあげて作文を書かせる前に動機づけをなさるわけです。そしてその時間に書かせないで、『さア書いてらっしゃい』とおっしゃる。独立した、人格をもった女性にしたい、という呼びかけなんですね。それで私たちも青年期ですから、土曜、日曜をつぶして一生懸命書いてきます。原稿用紙に十何枚も。それを先生も夜中までかかって一つ一つ見てくださった。よくできた時は、三重丸では足りなくて四重丸をくださる。すると、こちら嬉しいからますます書く気で物事を観察するようになり、書くためのいろいろな資料を読むようになります。人の話も注意深くきくようになりますでしょう。ですから、たんなる作文の先生ではなく、一つのまあるネッサンス、自己との対決を経験させてくださった先生です」<sup>35</sup>

小樽高女時代に河崎が実践してきた、生活の中に課題を見つけ感じるままに自由に綴っていく作文とは異なり、津田英学塾における、この作文授業は、論理的であるが故に自由裁量の余地が少ない。

### 3.7. 文化学院の教員時代

1921年4月に文化学院が発足する。時間割編成、通信簿、職員会議など実務面を河崎が取り仕切り、運営の中心になっていた。創立時の中心メンバーは、西村伊作(芸術家・建築家)、石井柏亭(画家)と謝野晶子(歌人)、与謝野鉄幹(歌人)といったように、芸術分野では業績のある人々であったが、学校教育には素人であり、唯一教員経験があるのが河崎であった。ここでも河崎は生徒の信頼も得て「学院のお母さん」と慕われていく。

文化学院中学部二回生・大学部本科2回生の田上千鶴子は、河崎の歴史の授業についてこう語っている。

私たちの教わった歴史は、政治権力の闘争や支配層の交代の歴史ではなく、その時代に何か目立った仕事をした女性、たとえば額田女王とか光明皇后とか、北条政子、淀君などに焦点があてられていました。光明皇后も淀君も、およそ先生からは想像もし難い女性像でしたが、語るにつれ、とうとうとした先生の口調は熱を帯び、両の手首をくねくねと動かし、言葉では足りないところは身ぶりや表情で、その人物になり切るかのように一語一語

に力をこめて話されると、私たちは時間の経つのも忘れてその話術に引き入れられるのでした<sup>36</sup>。

国語教師としての河崎の授業は定評があったが、歴史の授業にもその話術はいかされていたようだ。その国語の授業では新聞が活用されている。今日のメディアリテラシー教育の先駆けである。

女学部<sup>37</sup>16回生・文学部<sup>38</sup>8回生の式場美香子が河崎の授業の感想を記している。

国語をみていただいたのだが、教科書の勉強だけでなく、いろいろな社会的知識を先生から授けられた。新聞をもって教室に入られた日もあった。「さあ、今日は御本をしまってください。みなさんは朝刊をどの頁から読みますか。」三面記事を真先に読むという答えが多かったし、漫画が第一と子供らしい返事もあった。先生はここにこと新聞を高くかかげて、みんなが一番おしまいにするのは、この第一面でしょう。見ない人もあるかも知れない。だが、ここが新聞の命なのです」とおっしゃって、それまで目を通すことのなかった各新聞の社説に個性があることを教えて下さった<sup>39</sup>。

この記述から思い出すのは、河崎の少女時代の思い出である。

私の家の向かいが郡役所で、隣が自由党のクラブになっていて鉄格子からのぞくと、集会の有様が手にとるように見えました。ふだんは小使いのほか誰もこないのので、私はよくこのクラブへ遊びに行き、大阪の朝日新聞を読んだものでした。「女も新聞の論説位読めるようにならないといけない」と父にいわれて、子供の私は、ろくにわかりもしないくせに、朝日の論説を夢中になって読んでいました<sup>40</sup>。

河崎の父方の祖父である本城久平は松久という屋号を持つ代々の書肆であった。その後の河崎の歩みに、父や祖父の影響が読み取れる。

女優として知られる高峰秀子は1937(昭和13)年4月文化学院に入学しているが、担任は河崎であった。

(前略)ある日のこと、文化学院の河崎なつ先生から、母と私は電話で呼び出された。学校へ行ってみるとガラんとした教室の中で、河崎なつ先生は私たちを待っていて。そして首をかしげかしげ、重そうな口を開いた。

「文化学院が、いくら自由な学校でも、一ヶ月に二日や三日の登校日数では、進級させられぬ」

「このさい、学校をとるか、仕事をとるかはっきり決

めてほしい」

「秀子さんは俳優として有望だから、学校をやめて仕事に専心したらどう？」

「よく考えて、返事をして下さい」ということであった。

考える? いったい何を考えれば良いのだろう。私には考える余地もへったくれもありはしなかった。私が仕事をやめればその日から、母と私と、私の背中にしがみついている親戚たちは食うものも食えず路頭に迷うハメになる。俳優として有望であろうがなかならうが、私という金銭製造器が止まってしまったらすべては一卷の終わりである<sup>41</sup>。

多くの生徒から慕われ「学院のお母さん」と呼ばれていた河崎であったが、このように本意な形で、教え子を学院から去らせたこともあった。

### 3.8. 白梅学園短期大学教員時代

河崎の教師としての最後の奉職先は、1957(昭和32)年に設立と同時に迎えられた白梅学園短期大学である。

1941(昭和16)年に文化学院を退職し、戦後は参議院議員も務め、社会運動に軸足を移していた河崎であったが、教育の場に戻ってくる。

河崎はこの時点で68才であった。当時の女性の平均寿命と同じであったが、河崎の教育に対する情熱は衰えていなかった。当初は文学担当に加えて児童福祉の講義も受け持った。1962(昭和37)年4月から1966(昭和41)年3月までは保育科長を務め、児童福祉のみを教えることになる。

白梅学園短期大学25周年記念誌によると、「短大創設と同時にゼミナールが開設されており、一・二年生が合併で行い、教員の指導のもとに、上級生が自分たちの研究テーマの中に下級生を組み込んでいく形をとっていた。そのために年々研究の積み上げができるという利点も見られた。当時の短期大学で、ゼミナールを設けているところはほとんどなく、この構想は全く白梅学園短期大学独自のものであった」という<sup>42</sup>。

河崎は児童心理ゼミナールを担当するが、河崎は高齢にもかかわらず、常に学生の先頭に立って調査研究に出かけた。就任時に68才となっていた年齢を考えれば、教室内で文献を使う授業形式も考えられるが、活動的な河崎の真骨頂ともいえる。

「児童心理ゼミナール」は児童関係の施設や官公庁に見学の引率を度重ねて実施したが、やがてテーマを「スラム街の子ども」にしぼり、廃品回収の地域や簡易宿泊所の並ぶ施設や、その他のスラム街に分けて、学生の調査を方向づけた<sup>43</sup>。

具体的には足立区の本木町、「蟻の街」、台東区の日暮野町を調査対象とした。河崎は女高師の学生時代、二葉保育園を見学している。

二葉保育園は1900(明治33)年、女高師出身の野口幽香が、わずか六名の園児を集めて幼稚園としてはじめてが、1906(明治39)年に東京四谷鮫ヶ橋の貧民街に移り、働く母親のために乳児をあずかり、少年少女クラブや夜間裁縫所、日曜学校などのセツルメント式の活動を始めた。1916(大正5)年に二葉保育園と改め新宿旭町の貧民街にも分園をつくった。1935(昭和10)年には、深川にも母の家をつくって、このとき徳永恕が園長になった。働く母親の子どもをあずかる施設として、日本では最初のものであった。河崎は女高師の学生時代に、園長の野口幽香との関係で、古いエンピツをためて送ったり一年に一度、教生として出かけている。河崎が出かけたとき、小さな子どもたちが板を並べた机の両側に座り、「三銭はったら動物園に行きましょう」とうたいながら、内職の封筒はりをしていた。このとき受けた衝撃はあとあとまで消えることがなかった、となつは、後に語っている<sup>44</sup>。

ゼミナールで訪れた本木町での活動を見ていく。

ある時はこの街の小学生に「日曜日のこと」と題する作文を書かせて、それを他の山の手や下町の小学生の作文と比較するような研究を指導した。その結果、著しい差は、本木町の子どもの作文には、家族と一緒に行動した記録が少ないことや、全般に「ぼく」とか「わたし」とかいう主語の出現する度が他の地域の子どもの作文に比べてきわめて少ないことなどがわかった。家族と一緒に行動、たとえば公園に行くとかデパートに行くとかいうことが少ないことは当然としても、主語が極端に少ないのはどうしてかを、学生たちは真剣に討論し、環境の影響による自我意識の発達のおくれによるものではないかと推論した<sup>45</sup>。

作文という河崎の専門領域を児童心理に応用した、河崎ならではの手法と言えよう。ゼミナールは、ゼノ神父や北原怜子で知られる「蟻の街」にも出かけている。

住民が共通の目標をもって生活している「蟻の街」を見学した。ここでは、住居はまだ古いままであったが、共同の食堂や浴場が建てられ、街の中心にある会堂には「蟻の街のマリア」と呼ばれた北原怜子さんの遺影と、近く東京湾の埋立地に建設を予定している新しい街の模型が飾ってあった。荷車を引いて帰ってくる人々の目には輝きがあり、「ただ今」「お帰りなさい」「ご苦労様」などの会話が礼儀正しく交わされていた。人間にとってある目標をもつこと、特に共同体としての共通目標をもつことがいかに大切かを、学生たちは目の当たりに見て深い感動を覚えた<sup>46</sup>。

さらに河崎は、台東区山谷町の簡易旅館街にもゼミ

ナールの学生を引率して訪れている。

そこ(山谷町)は定住者が少ないので、住民相互のコミュニケーションが希薄で、すぐに衝突なども起こりやすかった。不就学時の率はA町より多く、小学校の分校が福祉センター内に設けられて、その対策に力を注いでいた。普通地区の住民以外には入れないような路地りでも、河崎教授は率先して入っていくので、学生も緊張し、二、三人ずつに分散して通行人のようによそおって通って行った。窓越しに見える簡易旅館の内部は、二段ベッドが並んでおり、畳一畳がその個人の住居であった。このスラム街の子どもについての研究成果は、年々二年生から一年生へと受け継がれて、見ごたえのあるものになっていった。当時の学園祭は、ゼミナールとクラブ(コーラス・児童文化・ボランティア・演劇・歴史研究など)の研究成果を発表する場で、児童心理ゼミナールの「スラム街の子どもたち」もその成果を発表した<sup>47</sup>。

#### 4. おわりに

河崎の学びの履歴は、順を追って①五條小学校②奈良県師範学校女子部③東京女子高等師範学校④東京女子高等師範学校研究科となる。また教師としての歩みは次のように大別できる。

①五條尋常小学校訓導時代

②小樽高女時代(作文を中心に地理や歴史も担当)

③女高師、東京女子大時代における作文教師時代

④文化学院において国語(作文・日本文学)を中心としながら地理、歴史も担当し、学校運営にも中心的に関わった時代。

⑤白梅学園短期大学における児童福祉を中心とする時代

このような教師としての歩みの中で、河崎が最も力を入れてきたのは作文教育である。しかし作文教育に関して、奈良県師範学校女子部や東京女子高等師範学校といった上級学校における影響は見当たらず、五條での小学校時代に受けた岡本作次郎の授業に強い感化を受けていることが自叙伝からうかがえ、作文教師としてのルーツは岡本から受けた授業にあるといえよう。

⑤の時代については、児童福祉のゼミナール活動が中心となっているが、スラム街とその他の地域の子供達に作文を書かせ、主語の比較を学生に調査させるなど、作文教育との関連性を見いだすことができる。

また河崎のゼミナールによるスラム街への調査活動は、河崎自身が五條小学校三年生の時に、被差別部落の級友とも分け隔てなく接していたこと、五條小学校訓導時代の欠食児童への食料援助、東京女子高師師範学校時代の二葉幼稚園での実習と連なると考えられる。岡本作次郎の作文指導に感化を受けたことを併せて考えると、河崎の教育者としての原点は、児童として学び、訓導として勤務した五條小学校での体験や経験に、その原点が



あるといえるのではないだろうか。

注

- 1) 久保義三他編(2001), 現代教育史事典, 東京書籍 p.490 には、河崎について以下のような記述がある。教育者。奈良県生まれ。東京女子高等師範学校文科学研究科卒。東京女子大教授。また文化学院などに勤務。1920年代、婦人参政権獲得運動などで活躍。46年民法改正のための司法制度審議会委員。47年参議院議員。55年第1回母親大会事務局長。白梅学園短大保育科長などを歴任。これらの活動を通して社会を変える原動力になる、個としての女性の育成に尽力する。
- 2) 河崎の代表的な著書として以下の単著がある。  
河崎なつ(1932), 職業婦人を志す人のために, 現人社  
河崎なつ(1933), 女性読本, 文藝春秋社  
河崎なつ(1934), 明日に生きる女性, 交蘭社
- 3) 大正期の芸術自由教育を代表する学校。1921年に神田駿河台に創設され、あえて高等女学校令によらない専門学校として発足した。西村伊作が校長、学監に与謝野晶子、石井伯亭、主任に河崎なつが就任した。創立3年目に中等教育としては初めて男女共学となった。教授陣には当時の一流の芸術家や知識人が名を連ねた。久保義三他編(2001), 現代教育史事典, 東京書籍, p.444
- 4) 任 其愉(1998), 戦前文化学院における教育実践と生活, 東京大学大学院教育学研究科紀要教育学コース
- 5) 葛井義憲(2018), 自由と解放を求める西村伊作, 名古屋学院大学法学部名古屋学院大学論集言語・文化篇第29巻第2号, pp. 1-12
- 6) 大村はま(1906 - 2005)は、単元学習で知られる国語教育者。東京女子大学卒業後に、諏訪高等女学校、東京府立第八高等女学校、江東区立深川第一中学校、目黒区立紅葉川中学校、足立区立文海中学校、大田区立石川台中学校で教鞭をとる。『教えるということ』『大村はま国語教室全十五巻別巻1』など、多くの著作物がある。
- 7) 小笠原拓(2008), 大村はまの学びの履歴: 東京女子大学時代を中心に, 全国大学国語教育学会国語科教育研究大会研究発表要旨集, pp.137 - 140  
大村の自伝としては、以下のものがある。  
大村はま(2005), 大村はま伝 学びひたりて, 共文社  
大村はま(1990), 大村はま自伝 「日本一先生」は語る, 国土社
- 8) 年譜作成にあたっては、以下の文献を参照した。  
河崎なつ(1938), 私の歩んできた道, 婦人公論 1938年9月号, 婦人公論社

- 河崎なつ(1947), 私の歩いた道, 新しい教育と文化第1号, pp.40-41, 週刊教育新聞社  
林光(1974), 母親がかわれば社会が変わる 河崎なつ伝, 草土文化  
福田清人編 浜名弘子著(1968), 与謝野晶子, 清水書院
- 9) 河崎なつ(1938), 私の歩んできた道, 婦人公論 1938年9月号, 婦人公論社  
河崎なつ(1947), 私の歩いた道, 新しい教育と文化第1号, pp.40-41, 週刊教育新聞社  
なおこの二つの文献からの引用文は、現代仮名遣いに改めた。
  - 10) 森田節齋(1811 ~ 1868) 幕末・維新期の儒学者・志士。父文庵は医者。名は益、字は謙造。大和国五條生まれ。京都に出て猪飼敬所、頼山陽に学び、江戸で昌平坂学問所に入る。京都で開塾し、吉田松陰ら多数の尊皇攘夷派の志士が育った。安政年間に備中・備後・伊予・讃岐の各国を歴遊。晩年、門人が天誅組に参加したため幕吏に追われ、紀伊国那賀郡荒見に隠れ、愚庵と号した。  
日本史広辞典(1997), 山川出版社, p.2112
  - 11) 樽井藤吉(1849—1922) 明治期の社会運動家。大和国生まれ。漢学を学び、職を転々としたのち、1882(明治15)年5月「社会公衆ノ最大福利」などの綱領を掲げて東洋社会党を結成。同年6月結党と集会を禁止されたが、翌年一月党則草案を配布して禁錮一ヶ月。大阪事件にも連坐し、条約改正問題でも起訴される。1992(明治25)年衆議院議員。晩年は鉱山経営を試みるが失敗した。  
日本史広辞典(1997), 山川出版, p.1378
  - 12) 河崎は五條尋常小学校の児童時代の、被差別部落の子供との関わりを以下のように記している。そこには社会運動家としての萌芽が感じられる。  
「三年になると、近くの村の子どもたちがやってきましたが、勉強はできないし、身なりは汚いし、近よるとくさいし、掃除当番のとき、誰もそういう子どもの机をふいてやる者がありませんでした。私は、そうしたやり方になにか不合理なものを感じて、率先してその子供たちの机をふいてやりましたし、学校の帰りには女の子を村の近くまで送ってやったこともありました。」  
河崎なつ(1938), 私の歩んできた道, 婦人公論 1938年9月号, 婦人公論社, p.66
  - 13) 河崎なつ(1938), 私の歩んできた道, 婦人公論 1938年9月号, 婦人公論社, p.66
  - 14) 河崎なつ(1947), 私の歩いた道, 新しい教育と文化第1号, 週刊教育新聞社, p.40
  - 15) 岡本作次郎は1876(明治9)年奈良県生まれ。1900(明治33)年3月31日奈良師範学校を卒業。宇智郡五條高等小学校訓導。その後、東京高等師範

- 学校専修科、同専攻科を修了。千葉県安房中学校、福井県大野中学校勤務を経て東京文理科大学学生主事兼高等師範学校生徒主事を務めていたが、在職中の1938(昭和13)年に63才で死去した。著書『女子新修身書』は高等女学校向け、『中等新修身書』(弘道館)は旧制中学校向けの修身教科書に採用された。故岡本作次郎君教育功労記念会記念誌(1939)、故岡本作次郎君教育功労記念会編
- 16) 河崎なつ(1938), 私の歩んできた道, 婦人公論9月号, 婦人公論社, p.73
- 17) 深川明子(1979), 「明治期後半における綴方教授題材考: 自己の体験表現を中心として」, 金沢大学教育学部紀要教育科学編, pp.1-15
- 18) 河崎なつ(1938), 私の歩んできた道, 婦人公論9月号, 婦人公論社, p.69
- 19) 東京女子高等師範学校のこと
- 20) 河崎なつ(1938), 私の歩んできた道, 婦人公論9月号, 婦人公論社, p.77
- 21) 同上, p.77  
奈良師範学校女子部時代のエピソードは、奈良教育大学創立百周年記念会百年史部(1990)、奈良教育大史 一百年の歩み一, p.200にも取り上げられている。
- 22) 河崎なつ(1938), 私の歩んできた道, 婦人公論9月号, 婦人公論社, p.77
- 23) 同上, p.78
- 24) 尾上柴舟は歌人・詩人で女高師や女子学習院の教授を務めた。訳詩集『ハイネの詩』や金子薫景との共著『叙景詩』で知られる。与謝野晶子が主宰していた「明星」の終刊号に短歌を寄稿している。和田周三 上田博(2002), 新しい短歌教室, 晃洋書房, pp.253-258
- 25) 河崎なつ(1938), 私の歩んできた道, 婦人公論9月号, 婦人公論社, pp.78-79
- 26) 林光(1974), 母親がかわれば社会が変わる 河崎なつ伝, 草土文化, p.38
- 27) 同上, p.38
- 28) 桜陽開校80周年記念誌, p.88
- 29) 橋本美保監修(2017), 文献資料集成 大正新教育16 文化学院, 日本図書センター, p.379-380
- 30) 河崎なつ(1938), 私の歩んできた道, 婦人公論1938年9月号, 婦人公論社, p.79
- 31) 青山なを編(1966), 安井てつ先生追想録, 安井てつ先生記念出版会編, pp.29-30
- 32) 河崎なつ(1947), 私の歩いた道, 新しい教育と文化 第1号, pp.40-41
- 33) 河崎は東京女子大で教鞭をとる一方、1928年から1932年まで津田英学塾の教授も兼ねていた。樋口愛子は津田英学塾における教え子である。
- 34) 河崎は読売新聞の「身上相談」の回答者を、1921年から1934年まで務めた。
- 35) 林光(1974), 母親がかわれば社会が変わる 河崎なつ伝, 草土文化, pp.97-98
- 36) 文化学院史編纂室(1971), 愛と叛乱 - 文化学院の50年 -, 文化学院出版部, pp.142-143
- 37) 1927年に中学部が女学部に改称
- 38) 1925年に設置された大学部本科が、1930年に文学部に改称
- 39) 文化学院史編纂室(1971), 愛と叛乱 - 文化学院の50年 -, 文化学院出版部, pp.147
- 40) 河崎なつ(1938), 私の歩んできた道, 婦人公論1938年9月号, 婦人公論社, p.69
- 41) 高峰秀子(2011), わたしの渡世日記, 新潮社, pp.237 - 238
- 42) 白梅学園短期大学(1982), 白梅学園短期大学創立二十五周年記念誌, 白梅学園短期大学, pp.63-64
- 43) 前掲 p.64
- 44) 林光(1974), 母親がかわれば社会が変わる 河崎なつ伝, 草土文化, pp.35 - 36
- 45) 白梅学園短期大学(1982), 白梅学園短期大学創立二十五周年記念誌, 白梅学園短期大学, p.65
- 46) 同上, p.66
- 47) 同上, p.66

## 参考文献

- 河崎なつ(1938), 私の歩んできた道, 婦人公論1938年9月号, 婦人公論社
- 河崎なつ(1947), 私の歩いた道, 新しい教育と文化第1号, 週刊教育新聞社
- 林光(1974), 母親がかわれば社会が変わる 河崎なつ伝, 草土文化
- 小樽桜陽高等学校(1986), 桜陽開校80周年記念誌, 小樽桜陽高等学校開校八十周年記念事業協賛会編
- 橋本美保監修(2017), 文献資料集成 大正新教育16 文化学院, 日本図書センター
- 文化学院史編纂室(1971), 愛と叛乱 - 文化学院の50年 -, 文化学院出版部
- 白梅学園短期大学(1982), 白梅学園短期大学創立二十五周年記念誌, 白梅学園短期大学